

## 重要な決定にまつわる心理的特性からみた 医療系大学生の進路決定プロセスの特徴

筑波大学大学院（博）心理学研究科 本多 陽子

筑波大学心理学系 落合 良行

Characteristics of the course-selection process in medical sciences students examined in terms of psychological traits relating to important decision-making

Yoko Honda (*Doctoral program, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*) and Yoshiyuki Ochiai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study classifies approaches to course-selection in medical sciences students on entering college, and examines the characteristics of each approach from the perspectives of three psychological traits relating to decision-making. There are five approaches to course-selection: (1) an early-selection type, (2) a midway change type, (3) a just-prior selection type (4) an evasion type, and (5) an encounter type. The three psychological traits concerning important decision-making are (A) self-evaluation toward selection ability, (B) method for making important decisions, and (C) sticking with previous decisions. While evasion type was seldom observed among medical sciences students, a characteristic of midway change types was to experience uncertainty after making a decision. A feature of the encounter and early-selection types is the strong tendency to select, based on careful deliberation, courses for self-development. A characteristic of the just-prior selection type is not to see the cause of failures in past decisions.

**Key words:** course-selection processes, psychological traits in important decision-making, medical sciences students

### 問 題

青年期における進路決定の問題は、主に卒業を目前にした大学生を対象に検討されてきた。そこでは、進路決定の困難さの分析など、決定場面に直面した大学生が抱える心理的問題が扱われてきた（例えば、Gati, Krausz & Osipow, 1996；若松, 2001）。しかし、青年期の進路決定の問題を解明するためには、決定場面での問題のみを扱うのではなく、そこに至るまでの過程についても検討する必要がある。

大学に進学する高校生の進路決定に関して、「成績がよい学生ほど、『自分はなぜ大学に行くのか』

といったことはまず考えない（若松, 2003）」という指摘がある。あるいは、「生徒は自主的に進路を選択するのではなく、なかば受動的な形でチャンスを頼りにする（武衛, 1991）」という指摘もある。さらに、柳井（2001）は、「大学入学時点、つまり高校生の進路決定に問題があったり、進路意識が未熟なまま決定すると、その後の生活に適應することが困難となり、大学生の学習意欲の欠如やアパシー、留年などの現象を招来することになりやすい」と言及している。つまり、目的や方向性を見失ったまま大学生活を送ると、その後に直面する進路決定に困難が生じてしまうと考えられる。こうした観点からすると、大学入学時点までの進路決定が

どのようなプロセスを経てなされてきたのか明らかにすることは、大学卒業時の進路決定の問題を考える上でも有用であると考えられる。

河崎(2002)は、大学4年生を対象としたインタビュー調査をもとに、小中学校段階から就職活動期までの進路決定プロセスを4つの類型に分類している。それらは、(1)早期決定型：小・中学校段階で特定の職業イメージを内在化し、周囲の意見や就労の経験で強化されながら、顕著な葛藤経験がないまま職業を決定していく型、(2)途中変更型：小・中学校段階で内在化された職業イメージを、成績による進学先の調整・両親などの周囲の反対・就労の経験や突発的な状況変化によって、大きな葛藤を伴って変更する型、(3)直前決定型：中・高等学校時代に実現可能な職業イメージを構築できず、大学進学後も職業イメージが拡散したまま、就職活動期に初めて葛藤経験を伴って決定を行う型、(4)回避型：職業イメージが拡散したまま、就職活動期になっても活動を経験せず、決定を回避する型、の4類型である。この4類型をもとに、筆者らが医療系大学生1年生の大学進学進路決定プロセスを探索的に調査した結果、4類型のいずれにもあてはまらない「その他」の回答が相当数出現した。「その他」の内容に関する自由記述を検討したところ、高校生ぐらいになってから何かのきっかけでその職業があることを知り、それ以来その進路に進もうと決めていた、という「出会い型」と命名できる進路決定プロセスが存在することが予想された。

そこで本研究では「出会い型」を含めた5類型を設定し、医療系大学生の大学入学時点での進路決定プロセスが5類型で網羅できるかどうか確認することとした。

つづいて、進路決定プロセス各類型がそれぞれどのような特徴をもっているのか検討した。例えば、直前決定型や回避型は意思決定に自信が持てないという問題点が指摘されているが(河崎, 2002)、このように各類型に特徴的な心理的特性が存在する可能性がある。本研究では、進路決定プロセスの類型ごとの特徴を探る視点として、重要な決定にまつわる心理的特性を設定することとした。重要な決定にまつわる心理的特性の内容を、決定前・決定時・決定後という時間的側面から捉えると、次の3つの特性が考えられる。すなわち、自分で決定する能力を日頃どのように自己評価しているかという「決定力に関する自己評価」、決定する際にどのような基準でどうやって決定しているかという「重要な決定の仕方」、重要な決定した後にそれがうまくいかなかった場合、過去に下した決定をどのように捉える

かという「過去の決定へのこだわり」である。本研究では、以上の3つの心理的特性の内容を探り、これらの観点から進路決定プロセスの各類型の特徴を明らかにすることを目的とした。

## 目 的

1. 医療系大学生における入学時点の進路決定プロセスが、河崎(2002)の4類型に「出会い型」を加えた5類型で説明できるかどうか確認する。
2. 重要な決定にまつわる3つの心理的特性：(A) 決定力に関する自己評価、(B) 重要な決定の仕方、(C) うまくいかなかった場合の過去の決定へのこだわり、の内容を明らかにする。
3. 重要な決定にまつわる3つの心理的特性の点から、進路決定プロセスの類型ごとの特徴を検討する。

## 方 法

1) 調査時期 2003年6月

2) 調査対象者 公立医療系大学1年生158名(男性47名、女性111名)。看護学科、理学療法学科、作業療法学科、放射線技術科学学科の4つの専攻のいずれかに在学している。

### 3) 調査内容

(1) 進路決定プロセスの類型：河崎(2002)による進路決定プロセス4類型(「早期決定型」, 「途中変更型」, 「直前決定型」, 「回避型」)に「出会い型」を加え、「その他」と合わせて合計6つの選択肢を提示した。選択肢の説明文は、河崎(2002)を参考にし、医療系大学生に合うように修正した。「あなたの職業決定は、どのように進行了ましたか」という教示と、Table 1に示す6つの選択肢についての説明を提示し、自分の進路決定プロセスに最もあてはまる選択肢を一つ選んでもらった。

(2) 重要な決定にまつわる心理的特性

(A) 決定力に関する自己評価：「あなたは、自分の決定する力について、どのように考えていますか」という教示を与え、独自に作成した8項目について「5. 非常によくあてはまる」から「1. まったくあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

(B) 重要な決定の仕方：「あなたは、重要な決定をするとき、どのように決定しますか」という教示を与え、独自に作成した18項目について「5. 非常によくあてはまる」から「1. まったくあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

(C) うまくいかなかった場合の過去の決定へのこ

だわり：「重要な決定をした後、それがうまくいかない場合を想像してみてください。そのとき、過去の決定をどのように考えますか」という教示を与え、独自に作成した11項目について「5. 非常によくあてはまる」から「1. まったくあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

## 結 果

### 1. 医療系大学生の進路決定プロセス5種類の分布

医療系大学生の進路決定プロセスの類型に関する回答を Table 2 に示した。5つのどの類型にもあてはまらず「6. その他」を選択した人数は1名であった。医療職を選択した大学生の進路決定プロセスの類型は、この5種類ではほぼ網羅できることが確認された。また、「4. 回避型」を選択した人数は2名ときわめて少なかった。医療系大学生の進路決定プロセスは、全体的に、多い順に出会い型、早期決定型、途中変更型、直前決定型に分布することがわかった。

### 2. 重要な決定にまつわる3つの心理的特性の内容

#### (A) 決定力に関する自己評価8項目の因子分析

回答者全員のデータを対象として、決定力に関する自己評価8項目について因子分析を行った。共通性を反復推定し、固有値の推移と解釈のしやすさを基準として、Varimax 回転後の2因子解を採用した。このとき、8項目の全分散のうち、回転前の2因子によって説明できる割合は、61.21%であった。結果を Table 3 に示した。

第1因子には、「自分で決定する能力がない (.84)」、「自分で決定することに自信がある (逆転: -.84)」、「自分で決定することが怖い (.79)」などの項目が高い負荷量を示した。自分で決定する能力に対する自信の無さや、自分で決定することに対する不安を表す捉え方であると考えられた。そこでこの因子を「A-F1 自己決定に対する苦手意識」と命名した。

第2因子には、「決定するのは早いですが、決定後に迷う (.82)」、「決定するまで時間がかかるが、決定すると迷わない (逆転: -.73)」という項目が高い負荷量を示した。決定後に迷いやすい傾向があるかどうかを表す捉え方であると考えられた。そこでこの因子を「A-F2 決定後の迷いやすさ」と命名した。

Table 1 進路決定プロセスの類型

類型	説明
(1) 早期決定型	小学校ぐらいから漠然と医療職を考え、その職業に就いている自分をイメージし、しかも周囲も勧めたので、意思が強まり、ほぼ希望通りの進学をした。
(2) 途中変更型	決めていた職業があったが、成績、周囲の反対等があり、大きな葛藤があったが変更した。
(3) 直前決定型	直前までどんな職業に就くかがはっきりせず、直前になって決定したが、決定した進路については決まった進路として運命だと受け止めている。
(4) 回避型	いつまでもどの職業に就くかがはっきりしないまま、そのときあった話に乗って合格してしまった。あまり将来のビジョンも明確でない。
(5) 出会い型	高校生ぐらいになってからのある時、この職業があることを知り、それ以来この職業に就こうと思っていた。

注：河崎（2002）を参考にして、独自に作成した。

Table 2 進路決定プロセス各類型の人数分布

	1. 早期決定型	2. 途中変更型	3. 直前決定型	4. 回避型	5. 出会い型	6. その他	合計
男性	11 (23.4)	9 (19.1)	13 (27.7)	0 (0.0)	14 (29.8)	0 (0.0)	47 (100.0)
女性	36 (32.4)	22 (19.8)	12 (10.8)	2 (1.8)	38 (34.2)	1 (0.9)	111 (100.0)
合計	47 (29.7)	31 (19.6)	25 (15.8)	2 (1.3)	52 (32.9)	1 (0.6)	158 (100.0)

注：数値は人数，( )内は%

Table 3 「(A) 決定力に関する自己評価」8項目の因子負荷行列 (Varimax 回転後)

	A-F1	A-F2	共通性	平均	SD
A-F1 自己決定に対する苦手意識					
Q47. 自分で決定する能力が無い	.84	-.11	.71	2.47	1.14
Q41. 自分で決定することに自信がある(逆)	-.84	-.02	.70	2.80	0.99
Q43. 自分で決定する能力があると思う(逆)	-.82	.05	.68	3.00	1.00
Q46. 自分で決定することが怖い	.79	.14	.65	2.81	1.22
Q42. 優柔不断で決定することが苦手である	.71	.04	.50	3.63	1.18
Q40. 自分で決定すると失敗することが多いと思う	.53	.32	.39	2.73	1.03
A-F2 決定後の迷いやすさ					
Q44. 決定するのは早いですが、決定後に迷う	-.16	.82	.70	2.61	1.16
Q45. 決定するまで時間がかかるが、決定すると迷わない(逆)	-.17	-.73	.56	3.03	1.20
二乗和	3.55	1.35			
寄与率(%)	44.34	16.87	61.21		

N=158

注：(逆)は逆転項目を表す。

**(B) 重要な決定の仕方18項目の因子分析**

回答者全員のデータを対象として重要な決定の仕方18項目について因子分析を行った。天井効果が見られた項目「自分が後悔しないかどうかで選ぶ」と、谷形分布を示した項目「直感を信じて直感で選ぶ」を分析から除外した。共通性を反復推定し、固有値の推移と解釈のしやすさを基準として、Promax 回転後の4因子解を採用した。このとき、16項目の全分散のうち、回転前の4因子によって説明できる割合は、51.37%であった。結果を Table 4 に示す。

第1因子には、「最後まで迷い、時間切れでとりあえずという感じで決める (.73)」、「決定を他者(親、社会など)がどのように評価するか考えて、評価されるほうを選ぶ (.71)」、「最後まで迷い、どちらでも大して変わりが無いという感じで選ぶ (.67)」などの項目が高い負荷量を示した。他者からの評価や経済的な面などの多くのことを考慮し、迷い葛藤した末に時間切れとなって決定するという決定の仕方であると考えられた。そこでこの因子を「B-F1 迷い葛藤した末に決定」と命名した。

第2因子には、「困難な方を選ぶ(逆転：-.83)」、「容易な方を選ぶ (.62)」、「自分が好きかどうかで選ぶ (.56)」などの項目が高い負荷量を示した。自分の好みや容易なものを選ぶ決定の仕方であると考えられた。そこでこの因子を「B-F2 好みや容易さで決定」と命名した。

第3因子には、「どうにかなるだろうという感じで選ぶ (.79)」、「なるべくしかならないと考えて選ぶ (.77)」、「嫌になったらいつでもまた選べばいいという感じで選ぶ (.53)」という項目が高い負荷

量を示した。将来を楽観し、熟考せずに選ぶ決定の仕方であると考えられた。そこでこの因子を「B-F3 楽観的な決定」と命名した。

第4因子には、「そこで自分が成長できるかどうかで選ぶ (.82)」、「十分考えたかどうかで選ぶ (.69)」などの項目が高い負荷量を示した。十分に考え、自分が成長できるものを選ぶ決定の仕方であると考えられた。そこでこの因子を「B-F4 成長を確信する決定」と命名した。

**(C) うまくいかなかった場合の過去の決定へのこだわり11項目の因子分析**

回答者全員のデータを対象として、過去の決定の認知に関する11項目について因子分析を行った。フロア効果が見られた項目「決定に影響を与えた人を恨むような気持ちになる」を分析から除外した。共通性を反復推定し、固有値の推移と解釈のしやすさを基準として、Promax 回転後の2因子解を採用した。このとき、10項目の全分散のうち、回転前の2因子によって説明できる割合は、50.00%であった。結果を Table 5に示す。

第1因子には、「過去に考慮しながら選ばなかった選択肢を選べばよかったと考える (.83)」、「決定のとき、自分の意思を貫かなかったことが原因だと思う (.79)」、「うまくいかないのはあのときの決定が間違いだったからだと考える (.64)」などの項目が高い負荷量を示した。うまくいかない原因が過去に行った決定にあるとみなし、他の選択肢を選ぶべきであったという後悔を表していると考えられた。そこでこの因子を「C-F1 過去の決定への原因帰属」と命名した。

第2因子には、「最終的に決定したのは自分だけ

Table 4 「(B) 重要な決定の仕方」16項目の因子パターン行列 (Promax 回転後)

	B-F1	B-F2	B-F3	B-F4	共通性	平均	SD
B-F1 迷い葛藤した末に決定							
Q52. 最後まで迷い、時間切れでとりあえずという感じで決める	.73	-.16	.04	-.10	.53	2.46	1.09
Q53. 決定を他者(親、社会など)がどのように評価するか考えて、評価される方を選ぶ	.71	.02	-.13	.05	.48	3.03	1.10
Q50. 最後まで迷い、どちらでも大して変わりが無いという感じで選ぶ	.67	-.23	.18	.00	.49	2.46	1.03
Q59. 経済的な面を考えて選ぶ	.56	.05	-.03	.29	.36	3.69	0.95
Q65. 妥協点を探して選ぶ	.42	.12	.38	-.08	.46	2.67	0.93
B-F2 好みや容易さで決定							
Q57. 困難な方を選ぶ(逆)	.24	-.83	.02	.14	.67	3.27	0.98
Q56. 容易な方を選ぶ	.18	.62	.16	-.05	.56	3.13	1.00
Q48. 自分が好きかどうかで選ぶ	-.29	.56	-.01	.34	.40	4.29	0.65
Q54. 自分が失敗しない方を選ぶ	.45	.48	-.10	.19	.53	3.47	1.11
Q58. 自分がやりたくないことはしないという感じで選ぶ	.06	.48	.12	-.38	.47	3.45	1.01
B-F3 楽観的な決定							
Q64. どうにかなるだろうという感じで選ぶ	.04	.13	.79	.11	.68	3.20	1.07
Q63. なるようにしかならないと考えて選ぶ	-.01	-.06	.77	.09	.60	3.03	0.98
Q60. 嫌になったらいつでもまた選べばいいという感じで選ぶ	-.02	.04	.53	-.23	.32	2.61	1.02
B-F4 成長を確信する決定							
Q62. そこで自分が成長できるかどうかで選ぶ	.02	-.06	.00	.82	.68	3.78	0.90
Q61. 十分考えたかどうかで選ぶ	.29	.06	-.08	.69	.51	3.35	0.98
Q55. 新しいことに挑戦してみようという感じで選ぶ	-.29	-.17	.35	.45	.47	3.41	0.94
因子間相関	B-F2	B-F3	B-F4				
	B-F1	.29	.24	-.14			
	B-F2		.10	-.13			
	B-F3			.02			

N=158

注：(逆)は逆転項目を表す。

Table 5 「(C) 過去の決定へのこだわり」10項目の因子パターン行列 (Promax 回転後)

	C-F1	C-F2	共通性	平均	SD
C-F1 過去の決定への原因帰属					
Q29. 過去に考慮しながら選ばなかった選択肢を選べよかったと考える	.83	-.05	.72	3.49	1.21
Q33. 決定のとき、自分の意思を貫かなかったことが原因だと思う	.79	.22	.53	2.89	1.21
Q30. 過去に選ばなかった選択肢の道を歩んでいる自分を空想する	.73	.18	.47	3.38	1.27
Q32. うまくいかないのはあのときの決定が間違っていたからだと考える	.64	-.24	.59	2.73	1.17
Q34. うまくいかない原因を過去の決定と結び付けて考えない(逆)	-.49	.42	.58	2.85	1.05
Q36. 決定までに時間が無かったことが原因だと考える	.31	-.08	.12	2.19	1.05
C-F2 前向きな受容					
Q31. 最終的に決定したのは自分だから、決定したことは受け入れる	.21	.84	.61	4.01	0.83
Q39. 十分時間をかけて考えたのだから現状を受け入れる	.12	.79	.56	3.72	0.91
Q35. 過去の決定を後悔するより、これからどうするのかを考える	-.19	.64	.53	3.93	0.90
Q38. 考えが変わったらいつでもまた決定すればいいのだと考える	-.06	.50	.28	3.33	1.10
因子間相関		-.41			

N=158

注：(逆)は逆転項目を表す。

ら、決定したことは受け入れる (.84)」、[「十分時間をかけて考えたのだから現状を受け入れる (.79)」、[「過去の決定を後悔するより、これからどうするかを考える (.64)」などの項目が高い負荷量を示した。過去に行った決定は決定として受け入れ、これから何をすべきかを前向きに考える思考を表していると考えられた。そこでこの因子を「C-F2 前向きな受容」と命名した。

### 3. 重要な決定にまつわる3つの心理的特性からみた進路決定プロセス各類型の特徴

つづいて、進路決定プロセスの各類型の特徴を、(A) 決定力に関する自己評価、(B) 重要な決定の仕方、(C) 過去の決定へのこだわり、という重要な決定にまつわる3つの心理的特性の点から検討した。まず、3特性の因子分析結果から、各因子に40以上の負荷量を示した項目を採用して素点の平均値を求め、各特性の下位尺度得点を算出した。その際、逆転項目の得点については逆転処理を施した。また、2つ以上の因子に高い負荷量を示した項目は除外した。進路決定プロセスについては、設定した6つの選択肢のうち、回答者が極端に少なかった「4. 回避型」と「6. その他」を分析から除外した。残りの4類型の回答者155名を対象として、各類型の決定に関する特徴を明らかにすることとした。

#### (A) 決定力に関する自己評価からみた進路決定プロセスの各類型の特徴

Table 6は、決定力に関する自己評価の2つの下位尺度得点の平均と標準偏差を各類型ごとに示した

ものである。2つの下位尺度得点それぞれについて、進路決定プロセスの4類型間で1要因分散分析を行った。その結果、どの因子においても有意差はみられなかった。このことから今回の結果からは、進路決定プロセスの各類型で決定力に関する自己評価に違いがあるとはいえない。

しかし、今回のデータは各群の人数が少ないため、有意差が出にくくなっている可能性がある。そこで本研究の目的である進路決定プロセスの各類型の特徴を探るために、各平均値の差の大きさに注目した。すると、「A-F2 決定後の迷いやすさ」では、途中変更型が最も得点が高く、直前決定型が最も低かった。そして、2群の差は0.47と比較的大きいものであった。ここから、決定力に関する自己評価に関して、「決定後の迷いやすさ」という点で途中変更型と直前決定型の間に違いがある可能性が示唆される。さらに途中変更型の得点は、4類型の中で唯一、中間点3を越えていた。つまり、途中変更型は他の3類型に比べ、決定力に関する自己評価のうち、決定後に迷いやすい傾向がみられる点の特徴ではないかと考えられる。

#### (B) 重要な決定の仕方からみた進路決定プロセスの各類型の特徴

Table 7は、重要な決定の仕方の4つの下位尺度得点の平均と標準偏差を各類型ごとに示したものである。4つの下位尺度得点それぞれについて、進路決定プロセスの4類型間で1要因分散分析を行った。その結果、「A-F4 成長を確信する決定」の得点においてのみ、進路決定プロセスの効果が有意であった ( $F_{(3, 151)} = 3.03, p < .05$ )。LSD法による多重

Table 6 「(A) 決定力に関する自己評価」2得点の進路決定プロセス4類型間の比較

	(1) 早期決定型 (N=47)	(2) 途中変更型 (N=31)	(3) 直前決定型 (N=25)	(5) 出合い型 (N=52)	F
A-F1 自己決定に対する苦手意識	2.88 (0.85)	3.09 (0.76)	3.03 (0.93)	2.92 (0.81)	0.52
A-F2 決定後の迷いやすさ	2.82 (1.12)	3.05 (0.81)	2.58 (0.83)	2.70 (0.89)	1.34

注：数値は平均値、( ) 内は標準偏差

Table 7 「(B) 重要な決定の仕方」4得点の進路決定プロセス4類型間の比較

	(1) 早期決定型 (N=47)	(2) 途中変更型 (N=31)	(3) 直前決定型 (N=25)	(5) 出合い型 (N=52)	F
B-F1 迷い葛藤した末に決定	2.87 (0.76)	2.97 (0.74)	2.78 (0.59)	2.79 (0.56)	0.54
B-F2 好みや容易さで決定	3.40 (0.72)	3.62 (0.45)	3.67 (0.60)	3.54 (0.60)	1.32
B-F3 楽観的な決定	2.94 (0.76)	2.88 (0.62)	2.93 (0.85)	3.00 (0.78)	0.16
B-F4 成長を確信する決定	3.61 (0.68)	3.40 (0.69)	3.27 (0.76)	3.69 (0.53)	3.03*

注：数値は平均値、( ) 内は標準偏差

\* $p < .05$  B-F4の多重比較の結果、早期決定型と出合い型が、直前決定型よりも有意に高かった。

比較の結果、有意であった差は、「早期決定型＞直前決定型」、「出会い型＞直前決定型」であった ( $Mse = .42, p < .05$ )。早期決定型や出会い型の学生は、直前決定型の学生に比べて、より「十分考えて、新しいことに挑戦し、自分が成長できると確信を持てるものを選ぶ」という決定をしている点が特徴的であると考えられた。

### (C) うまくいかなかった場合の過去の決定へのこだわりからみた進路決定プロセスの各類型の特徴

Table 8は、過去の決定へのこだわりの2つの下位尺度得点の平均と標準偏差を各類型ごとに示したものである。2つの下位尺度得点それぞれについて、進路決定プロセスの4類型間で1要因分散分析を行った。その結果、いずれの因子においても有意差はみられなかった。このことから今回の結果からは、進路決定プロセスの各類型で過去の決定へのこだわりに違いがあるとはいえない。

しかし、(A)と同様に、本研究の目的である進路決定プロセスの各類型の特徴を探るために、各平均値の差の大きさに注目した。すると、「C-F1 過去の決定への原因帰属」では、出会い型が最も得点が高く、直前決定型が最も低かった。そして、2群の差は0.42と比較的大きいものであった。ここから、過去の決定へのこだわりに関して、「過去の決定への原因帰属」という点で出会い型と直前決定型に違いがある可能性が示唆される。さらに、直前決定型の得点は、4類型の中で唯一、中間点3を下回っていた。つまり、直前決定型は他の3類型に比べ、うまくいかなかった場合にその原因を過去の決定に帰属する傾向が弱い点が特徴であると考えられる。

以上の結果をまとめ、決定にまつわる3つの特性それぞれに関して、各類型間で有意な得点差が見られた、もしくは得点差が比較的大きかった下位尺度

Table 8 「(C) 過去の決定へのこだわり」2得点の進路決定プロセス4類型間の比較

	(1) 早期決定型 ( $N=47$ )	(2) 途中変更型 ( $N=31$ )	(3) 直前決定型 ( $N=25$ )	(5) 出会い型 ( $N=52$ )	$F$
C-F1 過去の決定への原因帰属	3.02 (1.01)	3.19 (0.72)	2.84 (0.99)	3.26 (0.87)	1.43
C-F2 前向きな受容	3.72 (0.82)	3.73 (0.57)	3.79 (0.50)	3.80 (0.58)	0.15

注：数値は平均値，( ) 内は標準偏差

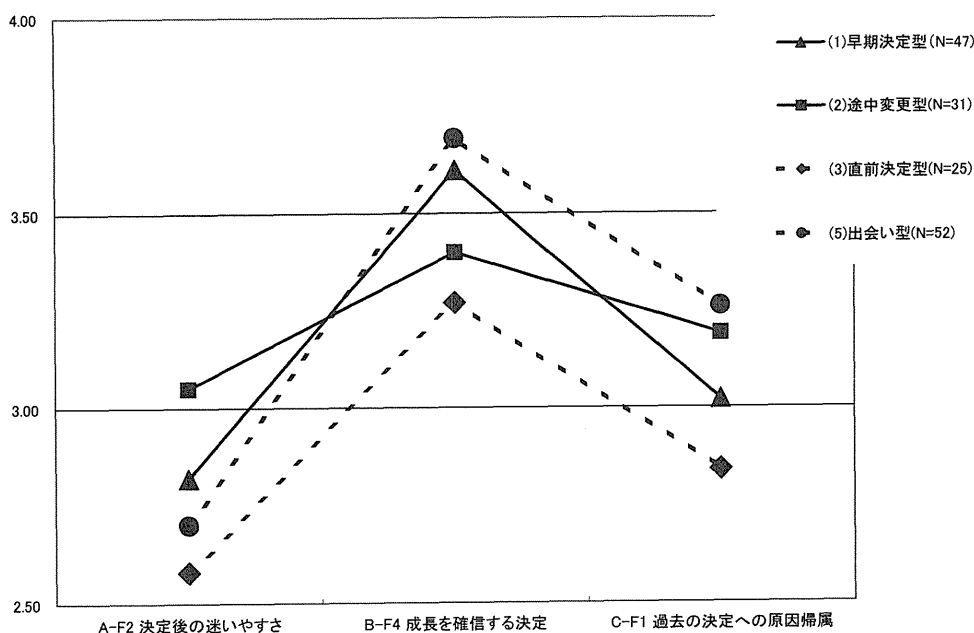


Fig. 1 決定にまつわる特性に関する進路決定プロセス4類型間の比較

注：4類型間に差が見られる特性のみ表示した

Table 9 決定にまつわる3つの特性からみた進路決定プロセス各類型の特徴

決定プロセスの類型	(1) 早期決定型	(2) 途中変更型	(3) 直前決定型	(5) 出会い型
決定にまつわる特性				
(A) 決定力に関する自己評価		決定後に 迷いやすい		
(B) 重要な決定の仕方	成長できるもの を選ぶ			成長できるもの を選ぶ
(C) うまくいかなかった場合 の過去の決定へのこだわり			原因を過去の決定 に帰属しない	

得点について、各類型ごとの得点を Fig. 1 に示した。さらに、この結果から予想される決定プロセスの各類型の特徴を Table 9 に表した。

### 考 察

本研究では医療系大学生を対象に、大学入学時点での進路決定プロセスを類型化し、重要な決定にまつわる3つの心理的特性という点から各類型の特徴を検討した。

まず、医療系学生の進路決定プロセスの類型は、多い順に「出会い型」、「早期決定型」、「途中変更型」、「直前決定型」であった。医療系学生の進路決定プロセスは、河崎 (2002) の4類型に「出会い型」を含めた5つで説明できることがわかった。しかしながら、職業イメージが拡散し、決定を回避している「回避型」はあまりみられなかった。この理由は、医療系大学のような特定の職業人養成課程の学生は、明確な職業イメージを持った上で進路決定を下している学生がほとんどであるためと考えられる。回避型を含めた各類型の特徴を検討するためには、特定の職業人養成課程ではない大学生など、対象者を拡大した調査が必要である。また、今回新たに明らかにされた「出会い型」という決定プロセスは、医療系大学生に特有な類型である可能性もある。この点を確認するためにも、他の学部と比較することが必要であろう。

重要な決定にまつわる3つの心理的特性について分析した結果、(A) 決定力に関する自己評価では、「A-F1 自己決定に対する苦手意識」、「A-F2 決定後の迷いやすさ」の2種類が見出された。(B) 重要な決定の仕方では、「B-F1 迷い決定した末に決定」、「B-F2 好みや容易さで決定」、「B-F3 楽観的な決定」、「B-F4 成長を確信する決定」の4種類が抽出された。(C) 過去の決定へのこだわりでは、「C-F1 過去の決定への原因帰属」と「C-F2 前向きな受容」の2種類が抽出された。抽出された各因

子をもとに、回避型を除く進路決定プロセス4類型の特徴を比較した結果、(A) 決定力に関する自己評価の「A-F2 決定後の迷いやすさ」、(B) 重要な決定の仕方の「B-F4 成長を確信する決定」、(C) 過去の決定へのこだわりの「C-F1 過去の決定への原因帰属」の3点において、類型間に有意差もしくは大きい得点差がみられた。その内容を順に考察する。

まず、決定力に関する自己評価という点からみると、途中変更型の特徴は決定後に迷いがちであるという評価をしていることであった。途中変更型とは、決めていた進路があったが成績や周囲の反対などの問題があり、大きな葛藤を経て変更したという決定プロセスである。能力や環境の要因のために自分の希望を貫かなかったという決定プロセスが、決定後の迷いを生じさせるのではないだろうか。

次に、重要な決定の仕方という点からみると、出会い型と早期決定型の特徴は、直前決定型と比べ、自分が成長できるものを十分に考えて選ぶ傾向が強いことであった。出会い型と早期決定型は、明確な職業イメージを内在化した上で進路決定を行っている決定プロセスである。この2つの類型は、それぞれ今回の調査対象者の約3割ずつを占めており、併せると6割に上る。大学進学時点で医療職志望という進路を決定している大学生の半数以上は、自分が成長できるような進路を選ぶという主体的で積極的な決定の仕方をしていることがわかった。

最後に、重要な決定をした後、それがうまくいかなかった場合に過去の決定をどのようにとらえるかという点から検討した結果、直前決定型の特徴はうまくいかない原因を過去の決定に帰属する傾向が弱いことであると示唆された。直前決定型は、それまでどんな職業に就くかはっきりせず、直前になって決定するというプロセスである。この型の場合、決定が短期間でなされ、決定した進路は運命と受け止められているため、決定すること自体にこだわりを持たず、うまくいかない原因が過去の決定にあると



思わないのかもしれない。先行研究では直前決定型は意思決定に自信が持てないという問題点が指摘されていたが（河崎，2002），本研究では直前決定型が特に意思決定に自信がないという結果は得られなかった。一方，今回見出だされた，直前決定型は過去の決定に原因帰属する傾向が弱いという結果がどのような意味を持つのかについては，今後さらに検討する必要があると思われる。

以上述べてきたように，医療系大学生の進路決定プロセスの類型ごとの特徴を，重要な決定にまつわる3つの心理的特性という観点から検討した結果，断片的ではあるが各類型の特徴が見出された。しかしながら，いくつかの問題点が残されている。例えば，今回は重要な決定にまつわる心理的特性の内容について，独自に項目を作成して探索的に検討したが，項目の妥当性や信頼性が十分に検討されたとはいえない。この点を解決するために，今後は得られた結果をもとに項目を整備した上で，再び各類型の特徴を測る尺度として使用する必要がある。また，全体的に各類型の人数が少なかったため，有意差が出にくかった可能性もある。今回みられなかった回避型を含めて検討するためにも，医療大生に限らず対象者を広く取り，人数を拡大した調査を行うことも必要である。これらの課題を克服した上で，大学入学時の進路決定プロセスがその後の適応や進路決

定にどのように影響していくのか，縦断的に検討していく必要がある。

## 引用文献

- Gati, I., Krausz, M. & Osipow, S.H. 1996 A taxonomy of difficulties in career decision making. *Journal of Counseling Psychology*, 43, 510-526.
- 河崎智恵 2002 アイデンティティを育てる教育 岡本裕子編著 アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房 241-259.
- 武衛孝雄 1991 キャリア成熟と生き方の設計 仙崎 武・野々村新・渡辺三枝子編 進路指導論 福村出版 89-102.
- 若松養亮 2001 大学生の進路未決定者が抱える困難さについて－教員養成学部の学生を対象に－ 教育心理学研究, 49, 209-218.
- 若松養亮 2003 進路選択の現状 後藤宗理・大野木裕明編 フリーター その心理社会的意味 現代のエスプリ427 至文堂 127-138.
- 柳井 修 2001 キャリア発達論 青年期のキャリア形成と進路指導の展開 ナカニシヤ出版 東京  
(受稿3月18日；受理5月19日)